

今回の県文学賞への川柳部門の応募者数は、昨年比で一般の部では横ばいの119人、ジュニアの部では4割増しの615人を数えた。ジュニア部門の増加は喜ばしいことではあるが、実情を見るとそうは言っておれない。それは、応募をしている学校が毎年限定されているということである。小学校で5校、中学校で6校、高校で5校である。それも応募が一人の学校が各部門に1校ずつある。佐賀県内の学校数からみて、極一部の学校からの応募であるという現状である。応募をされている学校の先生方の関心度と努力には頭が下がらる。敬意を表したい。

内容を見てみよう。一般の部では総合的に、昨年よりは句の力がアップしていると感じた。三席までは、甲乙付けがたい内容であった。どの句が一席になってもおかしくないほどの接戦であった。

前回も述べたが、一般の部での入賞の基準は、五句とも佳句であることが条件である。一句でも疎かにしてはいけない。

川柳は口語体で作るのが基本である。現代のかな遣いで作句してください。また「かな・けり」などの切れ字はよっぽどのが無い限り使わないで欲しい。

応募の句は、新作でなければならぬ。過去の入選句や、他人の句を投句するなどもってのほかである。

小学生の部。上位3句は、川柳を良く勉強していることが分かる句です。なにげない日常を素直に、17音

にまとめています。他の皆さんの句も上手にできました。これからも、自分のまわりのことを良くみて、川柳に挑戦してください。オノマトペと言って、「パンパン」「くるくる」「ひそひそ」「ドスン」などの擬音（きおん）を使うと、川柳らしくなりますよ。

中学生の部。一席の句は、他の句を圧倒していました。審査員全員が納得の句でした。二席の句は、情景が浮かんできます。三席の句は、図書館を本の庭と位置づけたところが良かった。全体的に、中句が8音になっっているのが多く見られました。提出する前に、もう一度指を折って数えましょう。助詞を一つ除けば7音になるケースがあるので、考えてみてください。

高校生の部。一席の句は、川柳を自分のものにしていきます。二席の句は、句材の「見つけ」が良い。野球の投手を詠んだだけが、光景が目に見え。三席の句は、静かな秋の月を彼女に見立てた、ロマンティックな句になった。秀作1のサッカーの句も、コロナ禍の中のスポーツの在り方に目を向けた句である。

ここで、作句のポイントを挙げておく。

- 清書する時は詰めて書く。575の間を空けない。
- 同じ意味の言葉の重複を避ける。
- 状況の説明だけの句は、そうでしか川柳になる。
- 全部を言ってしまう。読み手に想像させる。